

12/16(金)短答後Q&Aセミナー

目次

お知らせ LINE公式アカウント(p.2・3)

ボーダーに大きく満たなかった場合 過去のセミナーのお知らせ(p.4)

早稲田HR資料から 本試験成績別 今後1ヶ月の過ごし方(p.5)

5月短答を受ける場合

5月短答を受ける場合のスケジュール例(p.9)

1. 完全両立型(p.9)

2. 部分的両立型(p.10)

(1) 短答科目のみ論文対策

(2) 論文学習時期限定

短答論文対策を併行する場合 企業法について 条文に慣れるには

3. 短答特化型(p.14)

5→8突破に向けて意識してほしいこと 2つ(p.15)

12→8の場合(p.16)

論文式試験対策について

論文式試験の概要及びポイント(p.17) 必要とされる力(p.18)

学習の進め方(p.19)

事前質問(p.28)

お知らせ

■論文向け 答案作成ポイント講義が配信済みです。

→Web School 「講義視聴」「講義一覧」最上段

■論文対策講義は、初年度生は手続が必要です。

→Web School「講座からのお知らせ」欄

■論文基礎答練・論文アクセスの出題範囲が公表されています。

→Web School「学習フォロー」→「教材」

■1月・2月頃にかけて、福岡・広島・札幌・仙台・関西でHR・相談会実施予定

■~~1/17(火)夜18:30以降 早稲田校~~

——~~ボードーに大きく満たない見込みの方向けのHR・相談会~~

→別途イベントを企画中です。公式LINEで告知します。

■1/20(金)午後立川・夜早稲田校 5→8HR・相談会実施予定

■1/23(月)各状況別オンラインホームルーム実施予定(アーカイブ有)

会計士講座受験生向け

お知らせ用LINE公式アカウント

見逃しがちな重要情報・速報・時期別のポイント・よくいただくご質問等について、
目標年度・状況別に分けて、LINE でお知らせしています。ぜひご登録ください。

23目標5月短答受験生向け【12/20始動】

LINE ID 検索 「@23tac_5」

※合格発表までは、下記アカウントでも引き続き
短答向けの情報をお知らせします。



23 目標初学者向け

LINE ID 検索 「@23tac」



23 目標短答リスタート生向け

LINE ID 検索 「@23tac_tan」



23 目標論文リスタート生向け

LINE ID 検索 「@23tac_ron」



ボーダーに大きく満たなかった場合

計算のテコ入れが必要であったり、短答へ向けて各科目の目標とする状態が把握できていない・学習法がまだ定まっていない可能性が高い。

下記 2 つのホームルームについて、前半 1 時間ずつを視聴する。科目の講師への相談に先立って視聴すると、具体的なアドバイスが可能。

web school「講座からのお知らせ」欄にそれぞれアーカイブ動画・資料あり。

★口頭で補足している内容も多いため、資料閲覧だけでなく、
動画も冒頭1時間ずつ視聴。倍速視聴も可能。

■ 7 月実施 上級期ホームルーム

テキストベースでの復習・短答答練の準備・暗記回転の下準備

■ 9 月末実施 短答直前期ホームルーム

短答直前期 2 ヶ月の注意点・計算科目メンテナンス・理論科目回転方法など

早稲田 HR 資料から(竹内講師作成・平林補足)

本試験成績別 今後1ヶ月(論文アクセス・答練が始まるまで)の過ごし方

※あくまで目安です。優先順位などは状況により異なることがあります。ご了承ください。

【共通事項】

計算強化

財務管理計算に割く時間は、今後減ってしまう。計算に苦手意識がある場合、年末年始を利用して時間を取ってほしい。苦手論点がある場合、例題→トレーニングの順にこなして潰しておく。

例題の解説を読んでも全く理解できない場合には、どうしても必要であれば、講義まで戻って確認してもOK(この時期しかできない。)

財務計算

テキスト例題を確認した上で、パワーアップ問題を一通り解き、集計力等を付けるのがおすすめ。特に、基礎マスター3と4。

管理計算

苦手意識のある方は、テキスト・トレーニング(処理を説明)を進める。

テキストの熟読・想起は常に行う。テキストチェックゼミに視聴者として参加するのも◎。

理論科目の理解

短答問題集を解いてできる気になってはいなかったか。問題集だけでは、小手先の知識は得られても全体の理解をするには難しい。テキスト中心に学習していくことを強く推奨。論文の勉強(理解中心)が、短答式にも役立つ。

【今後やるべき事一覧】 ※優先順位は、状況別で後述

- 1 租税の講義
- 2 経営の講義
- 3 短答式の計算科目(上記の共通事項)
- 4 財表論文
- 5 企業論文
- 6 監査論文
- 7 短答式の理論科目

【74 %～】(データリサーチ最終版:ボーダー 71～73 に下方修正)

論文式を見据えた勉強に進む。論文の勉強法は後述。

優先順位は、上記のうち、 $1 \rightarrow 2 \rightarrow 3 \rightarrow 4 \rightarrow 5 = 6$

【71～73 %】

ボーダーは気になると思うが、租税経営の講義受講・復習と、

苦手論点(特に計算)つぶしは進める。基本的には上記と同じ過ごし方でOK。

優先順位は、 $1 \rightarrow 3$ (計算強化) $\rightarrow 2 \rightarrow 4 \rightarrow 5 = 6$

(理論科目論文対策は、答練出題範囲を参考にテキスト復習)

【 68 ～ 70 %】

講師の求める水準はある程度取れているが、理論科目の知識暗記のピーク合わせや、計算のメンテナンスに不足があった場合が多い。

もしくは、短答問題集ベースで取り組んでおり、基礎的な知識の理解が不足して難易度 A について数カ所取りこぼしがあるなど。

論文の勉強を通じて力を延ばす。特に、財務理論・監査論。

優先順位は1→3(計算強化)→2→4→6→5(監査論優先)

論文アクセスと基礎答練までは、71 %以上と同じように過ごすイメージ。

【 65 ～ 68 %】

計算力強化に意識を向ける。

短答科目の論文基礎答練まで(管理は論文アクセス優先)は受けた方がよい。

監査論は応用まででテキスト概ね1周のため、使いたい(できれば企業も)。

どうしても論文答練を受けたくないという場合は、短答論文双方に活きるように、3月末までは理屈も意識して、テキスト復習を厚めに進める(特に、財理と監査論)。

優先順位は3(計算強化)→4=6→5→1→7→2

租税法講義はBMの9回までを受講しておくとお。

経営学も、10回分受けておきたい。

【65 %未満や計算が苦手意識のある方】

今しか苦手を克服する時間はない。

基礎的な教材(テキスト・トレーニング・ミニテスト)へ戻ってでも、苦手論点は潰しておきたい。重要論点のうち、例題の解説を見ても理解できない論点は、講義まで戻って確認してもOK。

また、計算力はインプットとアウトプットから成り立っている。アクセスだけ回転しており、インプットが不足しがちだった場合、一度計算テキストの点検に時間を充てるのもよい。現状で積み残し(過去問集・パワーアップ問題)があれば消化したい。短答アクセスを3回など復習していた場合、いったん離れるなど。

【理論科目が取れなかった方】

本試験までに短答対策が間に合わなかった方も多いと思うが、理解中心の論文の勉強が、短答対策にも活きる。短答問題集回転で満足していなかったか?この試験を突破するには、全体を理解することが重要。テキスト中心の勉強を心がけて欲しい。

3月半ば頃まで短答問題集は一旦置いておくか、テキストの理解を固めつつ、インプットの確認としてゆっくり1・2周など。

短答問題集からテキストへ出題箇所のマークが振っていない・消化不良が大きい場合は進める(直前期の回転下準備)。

★短答に向けて、具体的な進め方は下記ホームルームを参考に視聴。

■7月上級期ホームルーム動画・資料

■9月短答直前期ホームルーム動画・資料

(Web School「講座からのお知らせ」欄)

5月短答を受ける場合のスケジュール例 (藤野講師作成・平林補足)

短答対策・論文対策について、いくつか例を挙げておく。

大きく3つに分かれる。

1. 完全両立型

2. 部分的両立型

(1) 短答科目のみ論文対策

(2) 論文学習時期限定

3. 短答特化型

1. 完全両立型 (12月短答合格ボーダーまであと数%だった方向け)

短答科目について、基礎、応用答練まで論文答練を受け、そのための勉強もする。

3月末までは論文の勉強をし、4月から短答の勉強に切り替える。

租税経営も、ある程度まで学習して、テキスト・トレーニング・アクセス4回目程まで
は行う。

この方法の場合、当然5月に受かった場合の論文合格率はかなり高くなるが、
短答勉強のスタートが遅いため、知識暗記・回転に不安がある方は、5月短答不合格
のリスクがある。

短答への切り替えの時期は遅すぎず早すぎずとならないように注意。

4月1日が一つの目安。

過去の合格者の中には、論文勉強で得たことが短答勉強にも役だったという声が多い
(特に財務と監査・管理)。

2. 部分的両立型

ex.5月短答への不安があるが、財務管理の苦手意識はそこまで無い

2つのパターンがある。 (1) 短答科目のみ論文対策型

(2) 論文学習時期限定型

(1) 短答科目のみ論文対策型

論文の勉強を短答科目である財務、管理、監査、企業に絞り、租税と経営については、講義を受けて最低限の翌日の復習にとどめる（もしくは講義を受けない）。

この場合、論文対策を短答科目に絞って行うことで、短答にも生きる力を効率的につけることができる。

※5→8生で、短答前に租税と経営の全ての講義を見て復習までしっかり手をつけられている人はあまりいないが、講義はある程度までは受けている人がほとんど。

5月後に効率的に学習を進めるためにも、途中までも講義を見ておくのがおすすめ（翌日に少し例題復習など）。

■租税法

基礎マスター9回（法人税基礎）、又は上級8まで（～所得税基礎/～消費税基礎）

※1月末や2月など、強く不安を感じた場合途中で止めるなど

■経営学

ファイナンス部分10回、もしくはテキスト①が終わる4回目くらいまで

(2) 論文学習時期限定型

前述の完全両立型における論文勉強から短答勉強への切替時期を、3月末より少し前倒しする(2月下旬～3月中旬など)。

この場合、論文の勉強も一通りやっているため、5月短答合格後にスムーズに論文勉強に入れる上、短答の勉強を完全型の人より早く始めるので少し余裕がでてくる。

この場合、目安として、最低限短答4科目の論文基礎答練は受ける(基礎答練は受け切っておかないと論文の勉強法が固まりにくい)。

完全両立型・部分的両立型共通

企業法 短答論文対策を併行する場合

論文対策

「ヤマを張ってヤマが出たら高得点」という方向で勉強せず、どんなジャンルから問題が出て一通り書ける、という状態を目標とする（12月合格者も同様）。

短答対策

企業法は暗記科目のため、直前期の知識整理が重要。問題集と出題履歴条文リスト（12月直前答練第3回の付録資料）を参考に、必ず覚えなければならない論点を確実に覚えるようにする。

企業法の短答対策は暗記のウェイトが高いため、短答対策は直前期に行うようにして、学習の前半は論文対策、特に論点对策を優先しましょう。

また、短答対策時代に条文のチェックが甘いと、条文検索力が12月短答合格者に追いつけないうちに本番になってしまう可能性があります。5月短答対策では、12月短答対策の時以上に条文を意識して学習する必要があります。

【企業法の短答対策を効率よく進めつつ条文に慣れるには】

学習法の例

①テキストを理解した上で、短答問題集の問題を解く



②短答問題集各問題について、復習方法を仕分けする

a. 条文を読んで復習する事項

条文のうち、正解に到達するために特に重要な言葉のみに、マーカーなどでチェックを入れておく。短答直前期に条文で点検しやすくする下準備。

b. テキストを読んで復習する事項

条文が読みにくいもの、比較整理の必要なものは、テキストまとめ表があったり、詳しい解説が載っている。

テキストに短答対策マークをつけて、そこだけ見直せばよいようにする。

c. 問題自体を解き直すことで復習する事項

1、2よりも問題自体を解き直すことがもっとも効果的な問題など。

ケアレスミス、ひっかけ問題など。

5月短答を受ける場合

3. 短答特化型

ex.元々5月に照準を合わせていた、計算科目の苦手意識が非常に強い

文字通り、短答科目について、12月短答までに配布された教材(+5月直前答練・全国模試)だけを使って5月まで進める方法。

この方法の場合、5月短答合格を最優先とするため、必然的に8月論文の合格可能性は下がるが租税の短期集中講義など、5月合格後に1から論文を仕上げるためのフォローもある(参考:合格者からのメッセージ集 5月短答合格後から論文の勉強を始めて受かった社会人受験生「鈴木さん」など)。

このケースでも、短答問題集だけを断片的に覚えるのではなく、**テキストの重要事項が説明できること、丸暗記ではなく納得感を重視して進める。**

下記2つのホームルームについて、前半1時間ずつを視聴する。

※ web school「講座からのお知らせ」欄にそれぞれアーカイブ動画・資料有り

■ 7月実施 上級期ホームルーム

テキストベースでの復習・短答答練の準備・暗記回転の下準備

■ 9月末実施 短答直前期ホームルーム

短答直前期2ヶ月の注意点・計算科目メンテナンス・理論科目回転方法など

★口頭で補足している内容も多い。資料閲覧だけでなく、動画前半1時間ずつを視聴。倍速視聴も可能。

5→8突破に向けて意識してほしいこと（藤野講師から）

1. これまで以上に、必死に必死に勉強すること。

現時点で、12月合格者との差はあります。そしてもちろん12月合格者も、論文に向けて先に進みます。その人達に追いつき追い越すためには、12月合格者よりも速いスピードで先に進む必要があります。もし12月合格者がどこかで雑談してたり遊んだりしているなら、自分はその間勉強して、差を埋めるための努力をしましょう。

勉強の質もそうですが、まずは勉強量を増やすことが第一です。

2. 費用対効果の高い勉強をすること。

時間が無い分、全ての範囲を完璧にするのは厳しいことが多いです。

基礎的な範囲を確実に、100%の完成度にするようにしましょう！

上級生は、過年度答練や短答対策講義教材よりも、初年度生が持っている、テキストや今年の答練・問題集を完璧にして、基礎的な内容を確実に固めましょう。

短答でも論文でも、みんながでる問題をできるようにすることが、合格するために最も重要です（論点の切り過ぎには注意）。

12→8月の場合

毎年、短答式試験が終わった後、いわゆる「燃え尽き状態」になり、次に切り替えられない方が多い。まだ勝負は終わっていない。次の目標もしっかり見据えて走り始めること。

多少復習が不足していても、必ず答練予定日（もしくは実施週中）には答練を受ける。「復習が終わっていない・・・」「万全の準備をしてから・・・」などの理由で受講を後回しにしないように注意。また、答練受験後は、必ず失点の原因を自分で分析し、必要に応じて講師やチューターに質問・相談する。

論文答練の復習方法→ 12/13(火)論文学習法セミナー

Web School「講座からのお知らせ」欄

論文式試験対策について

「論文式試験とはどのようなものか」を知り、その上で「どのように勉強していくのか」を、できるだけ早く掴んでもらうことが重要。論文式試験がどのようなものかを掴むには、「答練」の受験が最も効果的。

具体的にどのような勉強をしていくかについては、最初は試行錯誤しながらになると考えられるが、大卒の流れを以下共有する。

論文式試験の概要及びポイント

実施概要

- 1日目 午前：監査論100点・午後：租税法100点
- 2日目 会計学300点（午前：管理会計100点・午後：財務会計200点）
- 3日目 午前：企業法100点・午後：選択科目100点

合格基準

52%の得点比率（≡偏差値）を基準

※科目ごと・大問ごとに得点比率（≡偏差値）が出る。

→「この大問で稼ごう」など欲を出さない。

各大問、下振れしても平均を取る意識で解く。

※大問ごとに、素点ゼロは、得点比率ゼロとされる。

→苦手な論点でも全切りはしない。

周りと同じ程度に、簡単な箇所を拾えるように備える。

論文式試験 成績の決まり方とポイント (合格者答案参照)

計算・理論科目共通

ex. 会計学第3問素点20点/60点 偏差値50→ 60×0.5 →調整後得点30/60点

- 大問ごとに得点比率(≠偏差値)が付き、大問ごとの配点に応じて加重される。**時間配分に注意。**
難易度にもよるが、大問1つについて、1時間を大きく超えないように。管理は20~25分×4問など。
大問ごとに平均を死守する。
- 解答用紙・解答欄取り違えに注意。指差し点検。

★素点ゼロの大問は、得点比率もゼロとなる。必ず素点1点は確保。特に、管理会計第2問や企業法。
★大問合計偏差値40未満の科目がある場合、足切りとなる(大問ごとではなく、科目全体の合計)。

計算科目

- 比較的平易な箇所を**正確性**を重視して正答すれば、合格点に届く。
時間配分に注意。やらかしミスの傾向を把握して対策。

理論科目

- **問題文の意図を読み取り、素直に答える。**
「答練が当たった!」「もらった!」等思った時ほど、要注意。
論点を早合点しない。問われていることを見定めてから書き始める。
★答練で手応えと結果に乖離がある場合、「論点ズレ」の可能性あり。分析して講師と相談。
- **解答行数が余ったとしても、余事記載(問われていないことまで記述)で埋めない。**
問いに対して、素直に丁寧に、「過」不足なく答える。
- 「~の観点から」「~に照らして」「~を踏まえて」「~と比較しながら」などの指示に従う。
- 応用的な問題は、時間を掛けすぎないように、時計を見てから解き始める。
- 基準集が使えるようにする。

論文式試験 必要な力[全般] (大部分は短答対策と共通)

Input面

★ テキストや問題を形式的に何度も「回転」するのではなく、
その時々で「どんな力を伸ばすか?」目的を持って取り組む。

- テキストについて、理解している(比較ができる、具体例が説明できる)。
- テキストを閉じた状態で、基本的な内容を想起・説明できる。

★ 「知っている」「見ればわかる」では足りない。
問題を解いた後、「テキストの周辺論点」まで想起できるかを意識。

Output面

- 問題文を読み、テキストのうち、どこが問われているか掴める。
★ アウトプットを通じて、テキストのインプットの穴発見。
- 問題に対して、素直に「過不足なく」答えられる。
- 基準集が使える(監査論、租税法、財務理論、企業法)。
- 得点に繋がられる。(試験前のピーク合わせ、時間配分・難易度の読み取り、読み飛ばしなどのやらかしミス対策、部分点獲得等)

論文の学習の進め方

1. 答練に沿って学習 Web School「学習フォロー」→「教材」

初めのうちは、答練の出題範囲表に従って、答練の準備とその答練の受験という形で日々の学習を進める。だんだん、こういった勉強をする必要があるかや答練の準備にかかる時間が拵めてくる。「第1回全国模試の日までにテキストを1周読み終わるためには1日30ページ読もう…」のような形で「ゴールから逆算し、いつまでに何をやらなければいけないか」を割り出する。

答練は、校舎にもよるが、大体1月後半頃からスタートする。

まだ、先のように感じるはずだが、今から準備をしておかないと、絶対に途中でパンクする。特に、2月3月は非常に忙しい。苦手分野がある場合には、その補強を優先的に行き、最初の基礎答練に向けての準備も始める。

論文式試験で高得点を取れるようになっていくためには、

「①（範囲を見ながら）答練に向けたしっかりした準備をし②答練を期日通りに受け③返却された自分の答案の良いところと悪いところを徹底的に分析する」ことが何より大切。基本的なことだが、しっかりと行う。

2. 租税法及び選択科目について

12月から授業は始まる。12月合格者は、必ず遅れずに授業を受けるようにする。

5月8月を狙う場合も、前述したとおり、状況に応じて租税経営の講義受講を進める。計算に苦手意識がない場合であれば、12月中に租税基礎マスター9回、経営学10回を受けてしまってもOK。学習法は、講義の中で説明される。

3.科目別の論文対策学習法

各科目について、以下具体的な学習法の例を示す。最初はこの例を参考にしながら学習を進めていき、2・3週間して勉強や答練の感覚が掴めてきたら、各自調整を加えていく。

※いつも通っている先生が別の具体的な指導をされている場合には、そちらに従う。

★唯一無二の「正しい」学習法はない。ゴールとする状態（テキストについて、理解した上で想起できる、時間配分ややらかし対策徹底により得点に繋がられる、など）に行き着けば、どんな方法でもOK。やり切ることが大事。

財務計算

①論文式試験における問題の特徴

第3問(1問目)は比較的簡単、第5問(3問目)は難解、構造論点が問われる傾向。

短答式受験時の計算力の維持。総合的な問題にも対応できるようにする。問題の取捨選択能力。みんなができる問題をできるようにする。

構造論点(連結、CF、組織再編)の復習。

論文重点出題項目を確認(現金など、短答でしか出題されない論点がある)。

→アクセスオリエンテーション又は短答/論文アクセス初回講義録参照。

②使用教材

テキスト、論文アクセス、論文答練(年末はパワーアップ問題で総合問題形式に慣れるのも〇)。

まずは、テキスト例題を完璧に解ける状態にする。特に、テキスト①～④の論文網掛け論点は、細かいところも含めて基礎が大切になる。可能であれば、理論と繋げられるところは意識して取り組む(退職給付会計など)。

テキスト⑤～⑨もテキストの理解が大事だが、総合問題の演習をした方が効果的。

1月にかけて、パワーアップ問題を活用。

→今年から、上級生にもPDFで配付。

Web School「学習フォロー」「教材」

財務理論 ※詳しくは、財理学習法レジュメ抜粋参照

①論文式試験における問題の特徴

会計学のうち、財務会計論部分(200点)において、配点の6割以上を占める。

総合偏差値に与える影響が、全科目で最も大きく、最重要科目。学習量のボリュームも多い。

論文の重要性★3つの基本的な論述問題は、しっかり論理構成を理解+キーワードを使って丁寧に論述できるように。★2つ・★1つは、強弱を付けながらそれなりに説明できるように。

基準集に載っている箇所を一度把握してテキストにマークを振っておく。

→論文式学習法セミナー p.23 合格者のテキストカラー写真有

②科目の論文式試験における勉強法の例

基本的な重要論点を理解し、論述できるようにする。

→テキストを何度も読む。精読・イメージ・具体例想起・サクサク想起・点検・目次学習

論文式確認問題集について何度も自問自答。一言バージョン、論理構成の流れ。

論文問題集で学習したものが実際にOutputできるか、口頭で説明して確認する。

初見の問題への対応力をつける。

→答練を解く。

管理会計論

詳しくは、論文管理セミナー視聴 (Youtube) →



①科目の特徴

論文式試験になると、管理会計論という科目名称は失われ、

「会計学(午前)」という名前に変わる。

日程としては、2日目の午前中に実施される。配点は満点が100点。

問題は大きく分けて第1問で50点分原価計算が問われ、第2問で50点分管理会計が問われる。

第1問、第2問がそれぞれ問1・問2に分かれるため、大きく分けて原価計算で2問、管理会計で2問の4問、それぞれ25点満点となる。

時間は2時間、各問にかけられる時間は25～30分が目安。

②使用教材

テキスト

論文理論問題集

総合問題集(5月や7月に実施など。テキストやアクセスが優先)

論文アクセス(計14回) …ペースメーカーとする。

論文答練(基礎3回、応用2回、直前3回、全国2回)

監査論

詳しくは、論文監査論セミナー視聴 (Youtube) →



①科目の特徴

監査論は、論文式試験科目の中ではどのくらい得点できるか最も不確実性が高い科目。答練ではいつも成績がよかったけど本試験ではイマイチだったとか、いつもはできないのになぜか本試験では科目合格が取れた…ということが起きやすい。

そのため、「本試験では監査論で点数を稼ごう」という考え方は危険。

位置付けとして、どのような問題が出たとしても、大きくは外さず得点比率52くらい取る、という程度に考えておく。論点ズレを起こしやすい科目でもあるため、答練復習時に慎重に分析する。

②勉強法の例

監査論は、たとえ同じ論点であっても、問題文の記述によって解答となる要素が大きく変わるため、どのような解答が求められているかを注意深く慎重に読み取る必要がある。しかし、コツを掴めるのは、論文までの折り返し時点くらいの時期と考えられる。まずもってやるべきことは、テキスト各論点の理解を最重要事項としながら、典型論点を納得・分析し、想起できるようにすること。問題集をきっかけとしながら、テキスト典型論点のインプットを進めていく。

教材→論文対策問題集、テキスト、監基報

企業法

詳しくは、論文対策講義初回視聴

企業法は、短答と論文で問題形式も違い、知識として覚えておかなければならないことも異なる。そのため、短答の時は軽視しがちだったテキストの「条文、趣旨、論点」をしっかり理解し、一部は覚える必要がある。

- ・条文の趣旨を理解し、イメージする。説明できるようにする。

→テキストの制度趣旨の解説を読む。具体例をイメージする。

- ・文章を論理的に組み立てて書けるようになる。作法を知る。

→答練を全て受ける。

分析して、気になる箇所は講師からフィードバックを受ける。

- ・論点を理解し、覚える

※文章の丸暗記ではない。理解して自然と説明できる状態に。

→論点リストから想起（年明け以降作成・配布予定）。

- ・条文を引けるようにする。目次から引けるようにする。

→問題集や答練に出てきた頻出条文をチェックし、定期的に目を通す。

※問題の解答内容自体を丸々覚える必要はない。

★「ヤマを張ってヤマが出たら高得点」という方向で勉強せず、

「どんなジャンルから問題が出ても、一通り書ける」、という状態を目標とする。

企業法の論文での位置づけ

企業法は合格者同士ではあまり点差の開かない科目。よって企業法で点を稼ぐことは考えず（あまりそういう事を考える人は居ないはずだが）、あくまで足を引っ張られないレベルに持っていくことを意識する。

企業法では主に3種類の知識を合格レベルになるまで増やしておく必要があり、習得のためのインプットの方法は種類ごとに異なる。

知識その1 条文検索力

（本試験での重要性A 学習時間 あまり時間はかからない）

論文では、配点の大きいメイン条文を現場で検索し、

さらに派生条文を探す必要がある。

テキストの重要論点や問題集掲載の条文には六法にマークをつけ、

問題文だけを見ながら条文を検索するという練習が必要。

知識その2 制度趣旨

（本試験での重要度A 必要学習時間 基本がわかっているれば、時間はかからない）

条文と並んで配点があるのが、制度趣旨の説明。

制度趣旨は「理解している」ということを採点者に認めてもらえればよい。そのため、テキストの表現を一字一句丸暗記する必要はない。多少崩れていても意味が通っていればなんとかなるという面がある。

制度趣旨を学習する際には、意味不明なまま取りあえず丸暗記、という学習は絶対にしないように注意する（制度趣旨が把握できていないと、問題の出題意図がわからなくなり、さらに論点の学習にも支障が出てくる）。例えば、法的安定性と取引安全は、説明内容によっては互換性のある言葉だが、同じ意味ではない。

知識その3 論点

(本試験での重要度B、学習時間 情報量が多いため、時間がかかりかかる)

条文の理解、制度趣旨の理解があることを前提に、その条文の解釈論を問うのが論点。争いがある論点が多いが、無い論点もある。

論点は、争点を理解したうえで、【①争点②自説③自説の理由】の三要素に分解して計画的におさえていく。時間のかかる作業であるため、ボリュームを確認し、答練の出題範囲に合わせてスケジュールを決めることが重要。

論点は、配点は少ない場合もあり、時には全く出題されない場合もある。それに関わらず学習に時間がかかる、という意味で割りに合わないと感じると思うが、大きな配点があることもあるため、どうしても避けて通れない。答練出題範囲に合わせて、まずは理解を進めていく。

論文の書き方

知識量が増えてきても、論文の書き方についての基本知識が不十分だと得点が伸びないことがある。基本的には答練を受けながら自然に身につけていく能力といえるが、少ない成功体験や失敗体験を拡大解釈して、誤った書き方になっている場合もある。まずは、Web Schoolで講義として各科目配信されている、答案作成ポイント講義を視聴し、基本ルールを学ぶ。

事前質問から

Q.通信生なのですが、答練やアクセスの時だけ校舎で受講することは可能でしょうか？

→はい、スクーリング制度利用で受験可能です。事前手続は不要ですので、当日に会員証をお持ちください。ただし、20回までという上限があるため、アクセスよりも、短答・論文直前答練で利用することをおすすめします。

Q.12月短答の得点比率が69.8%でした。公開模試や直3でA判定を取れていたのに、本番で予想以上に点が取れませんでした。原因は財務計算でA問題を2問やらかしミスで落としていたことと、企業法でA問題2問を知識不足で落としたことだと考えています。管理と監査は目標点を超えていました。

58を目指すにあたり、今後の学習方針として、租税法を今から講義日程に沿って受けて行ってもよいでしょうか。それとも、財務計算や企業法の基礎知識の復習といった、短答で明らかになった課題に時間を充て、租税法はやる気が無いときに見る程度に抑えた方がよいでしょうか。

また、今回の結果を受けて模試や答練で良い成績を取ってもあまり意味がないのではないかと落ち込んでしまっています。今後の答練との向き合い方について何かアドバイスがあれば伺いしたいです。

Q.今回の12月短答が準備不足で6割しか取れず、まだまだ短答式試験に向けてやることが多いのですが、どのように論文と並行するのか、また5月までは短答に専念した方がよいのかをお伺いしたいです。さらに12月短答式試験に落ちてから8月に受かる可能性と、8月だめで浪人してしまう人の割合が知りたいです。よろしくお願いします。

Q.12月短答ボーダーに足りなかった過年度生(4回目)です。

入門期の頃から財務計算が苦手で、前々回から得点率はほぼ変わっていません。

今後こういった学習を意識すべきかアドバイス頂きたいです。

とりあえずテキストの見直しとパワーアップ問題は徹底していこうかと思っています。

以下本試験の失点原因を参考に書いておきます。

問題3:本店期末商品の出し方が思いつかなかった(本店の商品a/cボックス書いた所で思考停止)

問題4:販売目的の不動産を正味売却価格で計算してしまう(簿価<正味売却価額なのに...)

問題5:小口現金 用度係の支出報告分を当座預金から減額してしまう(問題では記帳済み)

問題16:「S社の報酬と位置付けられている」という文章を「子会社自身の報酬と位置付けられている」と読み取ってしまう。P社個別では報酬費用発生しないのを覚えていたが連結では自身が無かった(選択肢的にIを選択)

問題17:資本剰余金9,000まで出したがTAX30%分引していない

問題22:合併と株式交換の結果が同じというのは知識としてあったが、問題を解いている時は気付かず、株式交換として解いたらよく分からなくなった。